

【インタビュアー】

本日は、第2回目となる古関裕而作曲コンクールの魅力と、音楽を活かしたまちづくりをテーマに、二人にお話をいただければと思います。

はじめに古関裕而作曲コンクールの魅力についてお話しいただければと思います。

【池辺さん】

作曲コンクールは幾つもあるが、作曲とは例えば誰でも何かを口ずさむとか、心に浮かんだ通りに口笛を吹いてみるとか、そういうことも作曲だけでも、ちゃんとした楽曲を作るとなると、楽譜に楽器を全部書くことが必要で、ある程度の技術が要るわけですね。

特に吹奏楽は楽器の種類も多く、大変な手間がかかる。それを書く技術を見るというのも1つあるんだけど、このコンクールはそこに古関裕而という冠がついている。

古関裕而さんというと、やはり誰もが知る通り非常に素晴らしいメロディーをたくさん書かれた方で、聴く人の職業、男女、地位とかそういうものを区別なく誰でも親しめるメロディーを書いた。それが冠になっているということは、そういうことを目指すコンクールということがわかるわけですね。

なので、先ほど言った技術の上にそのような古関裕而さんの作った音楽を継承したような、誰でも親しめる美しいメロディー、親しみやすい音楽というものを選び出そうというコンクールなので、非常にはっきりとした意図があるということになると思います。

ですから、他のコンクールとは少し違う明確な意図があって、どういうものが選ばれるか、どういう審査がなされるかということは、一般の方は誰でも興味があるのではないかと僕は思うので、非常に魅力的なコンクールだと思います。

【市長】

このコンクール自体、やはり古関裕而さんが生まれた町として、ここから音楽の文化が生まれていくような、そのようなまちづくりをしたいと思っています。

また、作曲家が世界に羽ばたいていくような、登竜門のようなコンクールになればいいと思い、目指したいと思っています。

その中でも池辺先生が話されたように、古関裕而作曲コンクールらしい、テーマ性を持った取り組みにしたいということで、審査では美しいメロディーを重視するということにした。

求めるレベルとしては、中学生や高校生のブラスバンドが理解して演奏できるような音楽を想定しているので、そういった意味では非常に親しみやすいコンクールになるのではないかと思います。

この大会の優秀作品で終わるのではなく、その後も様々な場面で演奏してもらえて、古関さんの曲のように馴染んでもらえるような楽曲が生まれるコンクールにしたいと思っています。

【インタビュアー】

当日、会場に足を運んだときに、楽しむためのポイントみたいなものがあったら教えていただければと思います。

【池辺さん】

まず吹奏楽というのは誰でも親しめるジャンルだと思いますね。

特に音楽を、割と色々な機械を通して聴く時代になってしまっていて、なかなか生音の音楽に接するというのが、少なくなってきている時に、生の管楽器・打楽器の響きを会場で聴くのは非常にいい体験になると思う。しかも最初の項目で言ったように、古関裕而さんの精神を受け継いだコンクールであれば、そのような音の中に非常に親しみやすい旋律が隠れている。そこから浮かび上がってくるものを生で聴くというのは、非常にいい体験になると思うんですね。

貴重な体験だし、忘れられない得難い体験になると思うのでぜひ生で聴いていただきたいと思いますね。

【市長】

我々が普段聴いているコンサートの曲は、それまでにかなりの回数、再生されるとか演奏されたものが多いわけです。

その点やはりこのコンクールの音楽というのは、その場で創造されたものを初めて聴ける面白さがあるんですね。

しかも、古関さんの曲らしい、親しみやすい曲というものの原点をそこで聴けるという面白さが、このコンクールにはあると思います。

【池辺さん】

今のお話はやはり作曲の仕事をしていると、なかなか気がつきにくいところのご指摘をなされたので、非常に大事なことですね。

楽譜を書く仕事である作曲家にとっては、楽譜というのは単なる記号なんですよ。

だけど、記号であってもあれは、他者に伝えるために必要なわけです。自分の中ではもう、音が鳴っていて、それを他人に伝えるために記号化する。初めて音になる瞬間というのは、作曲家からすると還流なんですよ。頭の中で鳴っていたものが戻ってくるわけです。

作曲家の頭の中にはこういう音が鳴っていたのかということが確かめられるわけで、これはある意味では、推理小説みたいなものでね、面白いと思うんですね。

【市長】

1回目のコンクールを聴いていても、最初は作曲コンクールというのは非常に難解なものなのかと思いましたが、古関さんのコンクールというテーマ性もあるし、それから、中高生向けに作られているという面もあるので、その点は非常にわかりやすいと思います。

また一方で、クリエイティブな部分もありましたし、凝っている面もあり、親しみやすさと、創造性がうまく混在しているところが面白いなと思いました。

【インタビュアー】

第1回と比べて、作曲家の皆さんの応募作品のレベルであるとか、コンクールの中に何か変化は出ていますか。

【池辺さん】

応募総数は第1回より減ったわけですけど、このコンクールはレベルとして、1回目もそうだが2回も一目で対象外だと分かるようなものが非常に少ないんですよね。ある程度の水準に達している。応募作品全部見てです。

それは吹奏楽というものを、中学や高校でやっている人口が多いのだろうと思いますし、そういう中から作曲をやりたいという人が出てくるのだろうと思いますね。非常に現場的だし、どういうふうに楽器を鳴らしたらいいかということを知っている人たちが書いていることはわかりますね。

先ほど作曲家にとって音がまた戻ってくる、還流の話をしましたけれど、そうではないものは見ていてわかるんですよ、楽譜というのは。

つまり、パソコン上で考えて、パソコンに操作させて、自分の中では何も音が聴こえていないというのは、譜面を見るとわかります。

2回目は1回目に比べると減りましたね。やはり吹奏楽の醍醐味、音の効果を知っている人が書いているなという感じがしますね。

【市長】

正直言うと、もっと応募が減るかもしれないと思っていたため、今回69曲の応募がありうれしく思っています。

それから、タイトルにしても、聴いてみたいと思えるようなタイトルが作られていて非常に楽しみだなと思っています。

そして私自身も、この古関裕而作曲コンクールが、どんなふうに作曲家の卵の方々に受けとめられているのかな、というのが気になっていたところなんですけど、第1回に参加された方々のお話を聞いた際には、すごい情熱を持って、或いは関心を持って参加いただいていることがわかり非常にうれしかったです。

この辺も池辺先生をはじめ、皆さんの周知のおかげで広がっていると思います。こういった、地方の小さな街がやるコンクールに、皆さん関心を持って受けとめていただいていると感じています。

【池辺さん】

古関さんはもともと非常によく知られた作曲家であるし、特に歌とかね、そういうものの方が有名なんですけど、それに伴って、スポーツショー行進曲をはじめ吹奏楽の世界でもすばらしい作品を残しているので、古関裕而さんの作品を広く体験しようという意味では、これは大きなステップになると思いますね。

【インタビュアー】

福島市ではこの作曲コンクールや記念音楽祭など、古関裕而を生かしたまちづくりを進めておりますが、音楽のまちづくりといったテーマについてお話をいただけますか。

【市長】

幅広い分野で古関裕而さんをテーマにしたまちづくりを進めていきたいと思っておりますが、ある意味一番専門的な取り組みが今回の作曲コンクールなわけです。

しかも市内だけではなく、全国各地から、作曲したものを応募いただいて、それで育てていこうというわけですから、まさに、この福島から世界に向かって文化を輩出していく取り組みがこれなんですね。

また単に福島からの発信だけでなく、そういう生み出す、創造性みたいなものを、市民、特に若い人たちに伝わっていくと、非常にいいなと思っています。

それ以外でも、古関さんをたたえる記念音楽祭があって、こちらはプロの人たちの演奏でもって古関さんの栄誉をたたえながらみんなで楽しむ。

その一方で、ここ古関さんのまちというのは、まさに音楽溢れるまちにしたい。

今まちなか音楽祭という形で、街中の色々な会場で演奏していただいて、みんなでシチュエーションに合ったような音楽を楽しむという取り組みを進めています。

そしてまた古関裕而のまちづくりという点では、メロディーバスといった、今回青いメロディーバスも出しまして、赤メロ青メロになっているんですけど、音楽をテーマにしたバスがあって、それが音楽を流しながら走るなんて、なかなか他にはないと思います。その点ではまさに街に音楽が溢れるという点もあるんだろうと思うんですね。

そしてもう 1 つ古関さんの大きな特徴として、野球を中心にスポーツに応援歌で貢献したというのがあるんですね。それは野球殿堂入りという形で実ったわけですけど、これも単にそこでおしまいではなくて、そのレガシーをこれからも活かして、野球大会に古関さんの冠をつけて開催をするとか、色々な形で古関さんの遺産というのを活かしたまちづくりを進めたいな、というふうに考えています。

【池辺さん】

今あちこちの都市で、音楽を通した発信っていうのは、非常に盛んになっていきますけど、音楽祭っていうか音楽の催しで誰かそこ出身の、偉人の名前が冠になるってあんまりないですよ。そういう意味ではこの古関裕而コンクールって非常に独特のユニークな発信の方法になっていると思いますね。

とにかく、自分たちの地方の特徴を発信するには、例えば、その地方の特産品とかね、或いは観光名所だけじゃないと思うんです。そこは、どういう人間を育んだかっていうことを発信するというのは、その土地の宣伝の仕方、主張の仕方として大きいと思うんですよ。

僕は福島市っていうとやっぱり、古関さんも思い出すし、それから僕がずっと特にこの 10 年自分の作品にもものすごく深く関わってくださっている、詩人の長田弘さんがこの方ですよ。

長田弘さんの詩から、タイトルをもらったりしてるんですけど、それからもちろん今は三浦尚之さんみたいな存在もあるし、非常に福島市が生んだ音楽の偉大な人間っていうのを、ちゃんと市が継承して、それを冠にしてどういう発信をしたらいいかっていうときに、作曲コンクールというのは非常に面白いと思うんです。

もちろん、色々な音楽祭のやり方もあるけど、作曲コンクールをここで開催しようっていうのは、非常にユニークな選択肢だったと思いますので、それをぜひ羽ばたかせたいですね。

【市長】

私自身はですね、古関裕而という名前、或いは音楽がですね、福島というものを感じ取ってもらえるものにしていきたいと思っています。

そのためにも、子供たちにも、古関さんの音楽っていうのを、色々なシーンに密着させて聴いてもらって、古関さんの音楽を聴いたときに、福島を感じ取り、懐かしんでもらうとか、そんなふうにしていきたいと思っています。

5月5日に、まちなかこどもの日というのを開催しました。子供たちの笑顔溢れるような、街なかのイベントにしたいんですが、実はそこで、街なか高原列車っていうね、ロードトレインになっているものですね、これも子供たちに、昔のデパートの屋上遊園地みたいな感じで乗せるんですよ。それも、単に乗せるんじゃなくて、古関さんの高原列車を聴きながら、乗せるようにしているんですね。

そうすると子供たちは、幼いころ、楽しかった思い出の中に古関さんの音楽が出てくるわけですよ。古関さんの音楽を聴いたときに、また福島を懐かしく思ってもらうとか、或いはまたそういう懐かしい思い出を元に、また街なかに来てもらうとかですね、古関さんと福島が結びついて、福島への愛着が生まれてくるような、そんな仕掛けをしたいなというものです。

【池辺さん】

素晴らしいですね。いいアイデアだと思いますね。